

九重・玖珠地域における安定草原の成立

早 川 康 夫

(九州農業試験場)

安定草原は有効水の乏しい条件下で成立する。九重火山群周辺は阿蘇と同様多雨地帯に存しながら安定した草地景観が保たれている。阿蘇と並んで大分—熊本を結ぶ古海峡上にあり、これを埋めた透水性の良い火山礫層岩を基盤としているためであろう。南岸すなわち安定草原成立の南限線は古中央構造線(大野川口—納池公園—山鹿牧場—坂梨牧場)、北岸(玖珠町北側)は北から流入の筑紫熔岩に覆われる。

筑紫熔岩は第3紀末～洪積初期に流出した輝石安山岩質の熔岩で、柱状節理を持ち玖珠川その他の河川の侵蝕を受けメーサあるいはピュート地形を呈す。台上頂面は安定草原となっているが、崩壊斜面土壌は多量の水分を含み、メーサ崖下から多量の湧水をだし杉の植林地として利用され、以下棚田に続く。すなわち安定草原は水の抜ける台地頂上部だけで、中腹以下に抜け水が供給され杉、田に利用されるばかりでなく輝石安山岩崩壊風化土は保水性も高く、草地には不適な条件と云える。主なメーサ台上草地は、

1. 日出生台 この地区最大の草原で、ススキを主体とし自衛隊演習場に供用され、1部周辺農家の肉牛が放牧されている。

2. 万年山 筑紫熔岩のメーサの上に更に流紋岩からなる万年山熔岩台地をのせ、2重メーサとして有名である。台上はススキ、ササを主体の草原で、1部町営牧場として草地化され、中程度の生産が続いている。

3. 大岩扇・小岩扇 典型的メーサ地形として天然記念物の指定を受けている。頂上はシバ主体の草原で、放牧に供用されている。草地化の計画もあるが、柱状節理の発達に特に良好なため乾燥低地力で草地化による増収効化は期待が薄いように思う。

以上の他のメーサ台上草地も部落供用の放牧地、採草地に利用されており、概ね順調なるも中腹以下に無理に造成した草地は惨憺たる状況である。

久住飯田高原は概ね800～1000mの角閃石安山岩丘陵で、透水性が大きくシバ主体(チガヤ、ススキも多い)の安定した草原を示す。筑紫熔岩とほぼ同時期とみられるが、1部筑紫熔岩を覆う箇所があり、僅かに遅れる。約3万年前丘陵台地を基盤にトロイデ火山として久住山、稲星山などが隆起し、九重火山群が完成した。筑紫熔岩ではメーサ台上にのみ安定草原の成立を見るが、久住飯田地区では丘陵斜面でも安定した草原維持ができる。両者の境界は涌蓋山北麓と宝泉寺を結ぶ線である。

4. 飯田高原 トロイデ隆起による九重火山群に囲まれ、盆地状となり、多量の噴出火山灰の堆積もあって、水の集り易い地形になり、千町無田や坊がづる付近に湿地を生じた。湿地化による安山岩の風化、一部火山灰の固結化もあり、局地的に透水の悪化した箇所もあるが、阿蘇カルデラのような湖成層の生成はない。局地的湿地を除けば、安定草地の維持が容易である。

5. 久住高原 阿蘇・九重を通じ最も安定した草原地帯である。例えば阿蘇中央火口丘の麓では多数の湧水地があり、中央火口丘を取囲んで環状に杉帯が見られるが、九重山群トロイデ崖下には杉は少ない。阿蘇に比べシバの多いのも乾燥度の一段と高い方証であろう。その代り地力が低く高収には多肥を要する。

以上のように九重山群周辺の草原は阿蘇より恵まれた条件にあるのにこれを活用すべき牛の頭数が少なく余裕が見られる。従って当分の間阿蘇よりも集約度を下げ、野草利用を含めた土地依存型に徹すべきではなかろうか。

